



国文学（中古） 関大中古文学研究者の水脈

著者	田中 登
雑誌名	國文學
巻	100
ページ	4-6
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/10160

国文学（中古）

— 関大中古文学研究者の水脈 —

田中 登

本誌「国文学」も、今号をもって、めでたく一〇〇号を迎えることになった。これを機に、本誌を舞台に数々の健筆をふるってきた中古文学研究者の足跡を、簡単ながらたどってみることにしたい。

関大の中古文学研究に関する歴代の専任教員としては、清水好子・片桐洋一・田中登・山本登朗（以上、着任順）となるが、本誌「国文学」との関連でいえば、非常勤講師としての勤務ではあるものの、どうしてもその名を逸することのできないのは、山脇毅である。

山脇毅は明治十八年滋賀県の生まれ。滋賀師範学校を経て、大正八年京都帝国大学文学部選科を終了。以後、滋賀・大阪の中学校教諭などを歴任。また、関西大学非常勤講師を、戦前の専門部時代から数えると、約三十年もの間務めた。

この山脇の名を一躍学界に知らしめたのは、片桐洋一をして「志ある実証主義」といわしめた『源氏物語の文献学的研究』（創

元社、昭和十九年）の刊行であった。これは平瀬家本が、当時学界でもその実態がよく分からなくなっていた河内本の内容を伝える貴重な伝本であることを論証したものだ。

次いで、山脇は、関大非常勤時代の昭和二十七年に「枕草子本文整理札記一」と題して、関大の「国文学」第六号に論文を掲載。この研究は三十五号（昭和三十九年）まで、延々十九回にわたって連載された。単行本『枕草子本文整理札記』（山脇先生記念会、昭和四十一年）は、この連載原稿を基にして刊行されたものである。

稿者は、ついに生前の山脇と接する機会を持つことができなかつたことを、人生の一大痛恨事とするものだが、稿者と同様の嘆きをかこつ人々のためには、左の二編の文章を薦めたい。

片桐洋一「山脇毅」（紫式部顕彰会『源氏物語と紫式部 研究の軌跡』（角川学芸出版、平成二十年）

増田繁夫「山脇毅——篤実の人・実証の源氏学」（紫式部学会『源氏学の巨匠たち』（武蔵野書院、平成二十四年）

山脇の逝去は、昭和三十九年の一月のことであったが、それと入れ替わるようにして、関大の専任教員として赴任してきたのが、清水好子である。

清水好子は、大正十年大阪府の生まれ。奈良女子高等師範学校を卒業後、昭和十九年東北帝国大学法文学部に入學するも、一年半にして退學。京都帝国大学文学部に入り直した。次いで同大学院で研鑽を積んだ後、金蘭短期大学助教授などを経て、昭和四十二年関大文学部に赴任となった次第。

関大「国文学」には、第四十六号（昭和四十三年）に「源氏物語の作風」と題する論文を発表。以後、「政治家藤原行成とその環境」（第五十号、昭和四十九年）、「屏風歌制作についての考察」（第五十三号、昭和五十一年）、「和泉式部日記の基調」（第五十四号、昭和五十二年）など、多彩な分野の論文を発表した。

清水論文の魅力は、その生気かつ香気あふれる文体にあり、後続の研究者の多くを魅了したが、ただ、その生前に刊行された論文集となると、名著の誉れ高い『源氏物語の文体と方法』（東京大学出版会、昭和五十五年）一冊しかなく、その点が、清水ファンをして慊焉の情を抱かしくしてきた。

だが、近年になって、その渴を癒してくれる出版物の刊行をみた。諸誌に発表された清水の論文を、内容ごとまとめた『清水好子論文集』全三卷（武蔵野書院、平成二十六年）がそれ。第一卷『源氏物語の作風』、第二卷『源氏物語と歌』、第三卷『王朝の文学』。編者は山本登朗・清水婦久子・田中登の三名。これ

によって、本誌に掲載された清水の論文も閲読が格段に容易となったのである。

なお、清水の人と学問を知るには、山脇の場合同様に、左の二編が必読の書であることを、言い添えておこう。

清水婦久子「清水好子」（紫式部顕彰会『源氏物語と紫式部研究の軌跡』角川学芸出版、平成二十年）

後藤祥子「清水好子——作者の息づかいに迫った読み込み」（紫式部学会『源氏学の巨匠たち』武蔵野書院、平成二十四年）

大阪女子大学学長の任を終えた片桐洋一が、清水好子の定年退職の半年遅れで関大に赴任してきたのは、平成三年十月のことであった。

片桐は昭和六年大阪府の生まれ。兵庫県立明石高校を卒業後、昭和二十九年京都大学文学部に入學。以後、同大学院修士課程・博士課程で学んだ後、大阪女子大学の助教授に赴任したのが、昭和三十四年の十月。二十八歳の若さであった。

三十余年に及ぶ大阪女子大在任中、片桐は、『伊勢物語の研究』全三冊（明治書院、昭和四十三年～四十四年）、『拾遺和歌集の研究』全二冊（大学堂書店、昭和四十五年～五十一年）、『中

『世古今集注釈書解題』全六冊（赤尾照文堂、昭和四十六年（十二）年）など、大著を次々に刊行、トップランナーとして常に学界をリードしてきたが、関大赴任後も、学問に対する情熱は一向に衰えることを知らず、本誌にも「拾遺集における後撰集歌」（第六十九号、平成四年）、「土左日記」定家筆本と為家筆本」（第七十七号、平成十年）、「冷泉家時雨亭文庫蔵『小野宮殿御集』の構成と成立」（第七十八号、平成十一年）など、精力的に論考を発表。そして定年間際の平成十二年には、『古今和歌集以後』（笠間書院）、同十三年には『源氏物語以前』（笠間書院）の二著を刊行して、学界を驚嘆させた。

また、片桐の終世の課題であった古今と伊勢の注釈についても、前者は『古今和歌集全評釈』全三冊（講談社、平成十年）、後者は『伊勢物語全読解』（和泉書院、平成二十五年）として、見事その責務を果たした。

なお、片桐の人と学問については、自己の研究のあゆみと中古・和歌の両学会の歴史とを重ねて、学問の何たるかを縦横無尽に語り尽くした『平安文学五十年』（和泉書院、平成十四年）を是非とも参照されたい。

さて、関大国文学研究室では、長年、清水・片桐と中古文学

の専任教員は常に一人で運営してきたが、今一人専任が必要だったの見地から、平成八年に至って、田中が新たに赴任することとなり、ここに、片桐・田中の二人体制がしかれることになったのである。そして、平成十四年三月をもって退職した片桐の後任として、新たに山本登朗を迎えることができ、以後、今まで山本・田中の両名で学生の指導に当たっている。

（たなか のぼる／本学教授）